

女性文末形式の発話機能に関する一考察

—文末形式に関する二項対立的な解釈の検証から—

金 秀 容*

Study concerning the Speech Function of Feminine Sentence Final Forms: an examination of gender based interpretations with respect to sentence final forms

KIM Soo-Yong

abstract

This study examines the diverse usage of feminine sentence final forms in terms of “speech function” documented through the disagreements of men and women in their 20s.

The result of the analysis surveyed four speech functions for feminine sentence final forms. These speech functions are: expressions representing “masculine elements” only, expressions representing “feminine elements” only, expressions representing both, and expressions representing neither elements. From this, the inability to explain the speech function of feminine sentence final forms from the existing definition that feminine sentence final forms have only feminine elements was comprehended. In terms of speech function, this signifies feminine sentence final forms can be seen as “non-gender based.” These results support, with regards to evidence of the repudiation of gender based linguistics, the relevance of this study’s analytic perspective.

Key words: qualitative analysis, speech function, feminine sentence final forms, feminine elements, masculine elements

1 はじめに

文末形式と性差に関する今までの多くの研究は、文末形式の性差はほぼなくなり、多様になっていると報告している。このような研究の多くは、「どちらの文末形式をいくつ使ったか」という言語形式を中心とした量的な分析が大半である。しかし、文末形式の多様な使い方を把握するには、「文脈の中で文末形式がどのように使われているか」を調べる必要もある。本研究はこのような立場から行い、多様な使い方のメカニズムを明らかにしたい。

2 先行研究

先行研究の多くは、全体的に、文末形式の性差の減少と多様性について報告している。これらの研究は、深尾(2004)と水本(2006)のように、小説やドラマのような人工的要素の強い資料を分析するか、人工的要素の強

キーワード：質的な分析、発話機能、女性文末形式、女性性の要素、男性性の要素

*平成17年度生 国際日本学専攻

い資料と実際の会話との比較を分析するという研究が主である。人工的要素が比較的少ない実際の会話のみを資料とした、遠藤 (2002) のような研究はあるものの、その数は非常に少ない。なお、これらの多くの先行研究は、言語形式を中心とした量的な分析を行っている。つまり、今までの研究では、自然談話を分析資料とし、言語形式よりはるその使い方を中心とした研究は、あまり行われていないということである。このような現状を踏まえて、本研究では、実際の会話を分析資料とし、文脈を重視する質的な分析を行い、男女による文末形式の多様な使い方を明らかにする。

3 分析の観点

質的な分析という立場から、文末形式の多様な使い方を探る方法として、本研究では、その「発話機能」を調べることにする。これは、言語形式よりはる文脈の中で言葉がどのように働いているかという言語機能に注目することである。山岡 (2008:4) では、「命題内容条件群の束によって規定される文の機能に、発話の文脈や発話参加者の人間関係などの語用論的条件を加味したものが発話機能 (speech function) ということになる」と記述している。このような発話機能の認定を、本研究に基づいて言及すると、発話機能は、言語表現のみでは決まらず、「沈黙」や「笑い」などの非言語表現及び相手の反応などの語用論的諸要素と統合されて決定できる。

従来、あまり行われていなかった文末形式の発話機能を調べることは、従来の研究の検証にも繋がる。このような検証を通して、本研究の観点の有意義性も確認する。具体的な方法として、本研究では、従来から女性文末形式と分類されていた文末形式に焦点を当て、これに対する先行研究での解釈との関連を、調べることにする。この際、女性文末形式に対する先行研究での解釈のみならず、常に対照的な関係にある男性文末形式に対する先行研究での解釈も共に観察する。要するに、「言語形式」と「解釈」という両者の関連性を、実際の会話を使って、発話機能の面から調べることである。

まず、女性文末形式の判断は、鈴木 (1997)・中村 (2000)・金水 (2003:135)・小川 (2006)・水本 (2006:57)・有泉 (2007:6) を、参考にした。以下に具体的な文末形式を示した。〈 〉の中に具体例を提示し、その際、以上の先行研究でも示されているものは () の中に入れた。矢印はイントネーションを示す。

女性文末形式としては、現在ではあまり使われていない「である」の意を感情を込めて表す「～てよ」と、感動・同意要求・勧誘・軽い念押しを表す「こと」系〈～こと (よ・ね)〉の他に、「わ」系〈～ (だ) わ (よ・ね・よね)〉、「かしら」系〈～ (の) かしら (ね)〉、「の」系〈～の↓ (よ) またはの↑〉、「よ」系〈～よ (ね)〉、「て / で」系〈～て (よ) またはで (よ)〉、「もの」系〈～ (だ) もの (ね)〉、「でしょう」系〈～ (の) でしょ (う) (ね)〉、「～ね」が入る。

次に、女性文末形式と男性文末形式の会話の中での働きに関して、従来の研究ではどのような解釈をしていたかを記述する。これに関する論文には、益岡 (1992: 222)・鈴木 (1997:71)・佐竹 (1998: 55)・有泉 (2007:9) などがある。これらを〈表1〉にまとめた。

〈表1〉文末形式とその解釈

該当論文	女性文末形式の働きに対する解釈	男性文末形式の働きに対する解釈
益岡 (1992)	断定を避け、命令的ではなく、自分の考えを相手に押し付けない	断定的、命令的、主張的、説得的
鈴木 (1997)	消極性による丁寧さの表示	積極性による親密さと優位性の表示
佐竹 (1998)	優しい、丁寧、上品	荒っぽい、乱暴的、下品
有泉 (2007)	消極的	横暴的

〈表1〉の女性文末形式に対する解釈と男性文末形式に対する解釈をみると、その内容が「対立的」であることが分かる。また、これらの解釈それぞれを、益岡 (1992: 222) では役割語の女性的な表現と男性的な表現として、鈴木 (1997:71) では男女それぞれが使うのに適切な言語方略として、佐竹 (1998: 55) ではステレオタイプのな女らしさと男らしさとして、有泉 (2007:9) では女性関連の印象特性と男性関連の印象特性としてまとめている。各々の研究が、役割語・実際の使用語・固定観念・印象のように、異なる次元で文末形式を記述するも

の、女性文末形式に対する解釈は女性の性質を、男性文末形式に対する解釈は男性の性質を記述している。言い換えると、これらは「女性性」と「男性性」という「二つの項目」にまとめられる。以上から考えると、〈表1〉に示した解釈は、「二項対立性」を表しており、今まで女性文末形式と男性文末形式の働きは、主にこのような思考の中から解釈されてきたと言える。

本研究では、女性文末形式の発話機能が、以上のような「二項対立の解釈」上に、成り立つのかどうかを調べる。

4 分析資料と研究方法

4.1 分析資料

〈表1〉に示した、女性文末形式に対する解釈と男性文末形式に対する解釈から考えると、例えば自分の意見を提示するという面に限れば、次のような対照的な解釈にまとめられる。女性文末形式は、相手への配慮を優先し自分の意見の提示に消極性を表す働きを持つ反面、男性文末形式は、相手への配慮よりは自分の意見の提示に積極性を表す働きを持つと解釈できる。そこで、本研究では、お互いの意見を話し合う会話を分析資料とする。以下はその詳細である。

全国共通語話者である20代男女（会社員や学生）を対象とする。2010年6月～7月に20代女性5名に調査を依頼し、同性の友人・異性の友人との電話の会話を、それぞれ20分間ずつ録音してもらった。「男女の違いと、男女ともに相手に対して理解できない点」をテーマにし、お互いに意見を出し合う会話を依頼した。収集した5組の会話は全て文字化¹し、資料とした。収集した会話資料は〈表2〉のとおりである。

〈表2〉 会話者と会話時間

「協力者」と「同性の友人」との会話	「協力者」と「異性の友人」との会話
BF01 ⇔ TF01 (20分)	BF01 ⇔ NM01 (20分)
BF02 ⇔ AF01 (20分)	BF02 ⇔ SM01 (20分)
BF03 ⇔ IF01 (20分)	BF03 ⇔ MM01 (20分)
BF04 ⇔ AF02 (20分)	BF04 ⇔ YM01 (20分)
BF05 ⇔ SF01 (20分)	BF05 ⇔ AM01 (20分)

会話者の表記において、協力者は、ベースになる人なのでベース(Base)の「B」と女性を表す「F」を組み合わせ、通し番号を付けた。話し相手は、名前のイニシャルと性別のアルファベット表記（女性は「F」・男性は「M」）を組み合わせ、通し番号を付けた。

4.2 研究方法

文字化した全ての会話資料の中から、会話者同士の意見が一致しない場面を選び出し、分析資料とする。その場面とは、相手の意見に同意しないことが、会話の文脈から読み取れる場面である。このような場面は、BF01参加の会話では17件、BF02参加の会話では21件、BF03参加の会話では19件、BF04参加の会話では7件、BF05参加の会話では6件、合計70件の場面が得られた。

「4.1」で記述したように、〈表1〉から、女性文末形式は自分の意見よりは相手への配慮に重点を、男性文末形式は相手への配慮より自分の意見に重点を置く形式であることが見受けられる。これを基にして、本研究では、会話の中で「対人関係を重視する行動」と「自分の意見を重視する行動」という二つの言語行動に注目する。以上の言語行動に使われた女性文末形式に、〈表1〉で示した既存の解釈、つまり、「女性性の要素」のみが表れているのか、「男性性の要素」のような他の要素も表れているのかを、発話機能の面から調べる。

5 分析と考察

女性文末形式は全部で27例、現れた。現れた全ての文末形式は、「でしょう」系・「もん」系・「の」系・「～ね」

である。女性文末形式の発話機能を分析した結果、以下、四つの発話機能が見られた。なお、これらの文末形式において、使い手の性別による大きな差は見られなかったため、使い手の性別に関係なく記述することにする。

5.1 「男性性の要素」を表す場合

会話中に使用された文末形式は、「～(ん)でしょう」が6例・「～もん」が1例・「～もんね」が1例で、全部で8例が現れた。これらは「でしょう」系と「もん」系にまとめられる。〈会話1〉と〈会話2〉がその一例である。左から順に、「通し番号」・「文の終了有無の表示」(「*」:終了、「/」:未終了、「*/」:分析対象外²⁾)・「会話者」・「会話内容」である。該当する発話は「⇒」で、該当する文末形式はゴシック文字の太字で示した。「。」は文の終わりを示す。「会話内容」の中で倒置表現が見られる場合は、文末とその次の単語にスペースを置いて区別する。

〈会話1〉BFは女性も自分の感情に正直になるのが良いと言う。SMは女性はやできないと言う。

- ⇒ 113 * SM01 でもやっぱ(.) {#} できないんでしょ↑ 女の人って。
 114 */ BF02 いや: =
 115 / SM01 =ついついなんかそういうふうには、
 116 * BF02 う:ん。
 117 * SM01 (1) 本当は大丈夫じゃないんだけど大丈夫って言っちゃったりさ:。
 118 * BF02 う:ん。
 ⇒ 119 * SM01 (1) でそれでふてくされちゃったりするんでしょ↑。
 120 * BF02 う:::んどうなのかな::?
 121 * BF02 なんかね::。
 122 * SM01 °う:ん°。
 123 * BF02 どうだろ?。

〈会話2〉IFは他人を理解する必要はないと言っている。BFはそれで全てではないと言う。

- 364 * BF03 いや::。
 365 * BF03 やでもそれだけじゃ [ないと思うけどね↑。
 366 */ IF01 [なんか
 367 * IF01 (1) うん?。
 ⇒ 368 * BF03 なんか(.) {°う:ん°} やっぱりだっても そつ結局さ:(.) もう100パーセントないも
 んね だつてね。
 369 * IF01 (1) う::ん。
 370 * IF01 だから::(.) 理解 (1) う::ん (.) なんかもその:(1) う:んなんだろう?その:(.) 理解: し::
 (1) なんなんだろう? 理解できない (1) ってまもし思ったとして:(.) {う:ん} 思った
 ことが(.) あったとして:(.) {う:ん} なんかも:(3) でも:(2) なんなんかいやなんでもな
 い。 =
 371 / IF01 =でもなんかそれを超えて理解ししたいって:(3) {う:ん} 思うような人(.) につい
 てはなんかも:、
 372 * BF03 (2) うんうんうん。
 373 * IF01 (1) ま: 理解しようと努力すればいいけど 別に: ね↑。

「でしょう」系に関して、本研究と類似の場面である断定・主張形の発話を、分析している鈴木(1997:68)では、「～でしょう」は丁寧体であり、丁寧さを保つ必要のある女性語として適切な表現であると述べている。しかし、〈会話1〉を見ると、「できない」と「ふてくされちゃったりする」のような否定的な表現と共に「でしょう」系を用いて、相手の意見を真正面から否定しており、相手が答えに困る状態を作っている。ここに丁寧さは見受けられない。むしろ、自分の意見に中心を置く「男性性の要素」を表す発話機能が見られる。

「～もん」系に関しては、『日本国語大辞典』(2001)によると、終助詞として使われる「もの(物)」は、「不

満の意をこめて反論したり、甘えの気持ちを持って自分の意思を主張したりする。主として女性・子供の表現と語釈されており、語釈の末尾に「もん」を参照することと注記がされている。女性文末形式の中で、この文末形式は、比較的自分の意見を明確に示す形式ではあるが、感情の面からの訴えであり、理性的な思考を基盤にする意見主張を弱めるため、意見主張への消極性を表す文末形式であると言える。これは「女性性の要素」である。しかし、本研究の分析資料は、不満の意を持って反論する場面ではなく、自分の意見を主張する場面である。このような意見の主張において、「～もん」系を使っている話し手に甘えの気持ちがあるのか、「甘える」の定義から探してみる。高松(2001:165)では、「甘え」と「甘える」に関して、一般人の概念規定と心理学者の概念規定との類似点を記述している。上位カテゴリーに現れているのは、「相手に依存したいという欲求」・「欠点や弱みも含めありのままの自分を受け入れてほしいという欲求や願望」・「愛情を受けようとする事」である。ここから、甘えの気持ちを持って主張を行うことは、相手に依存的であり受動的であることが分かる。〈会話2〉を見ると、BFが「～もんね」を使って反対意見を提示した後、IFはBFとは異なる意見は持っているものの、うまく表現ができず、何度も沈黙を挿入しながら困っている様子を見せている。このようなIFに対して、BFはいづちか通し番号372のような話の続きを促す合図を見せるのみで、相手との円滑な関係を取り戻そうとする努力は見られない。これは、BFは相手に依存せず能動的に自分の意見を主張している証拠であり、ここに甘えの気持ちは見当たらない。ここにも、自分の意見を重視する「男性性の要素」を表す発話機能が見られる。

これまでの分析から、女性も男性も女性文末形式の「でしょう」系と「もん」系を使う場合、必ずしも「丁寧さ」と「不満の表示・甘えの気持ちを持った主張」を表さないこと、また、「男性性の要素」である「自己中心的な主張」を表す発話機能を持つ場合があることが分かった。

5.2 「男性性の要素」と「女性性の要素」を同時に表す場合

会話中に現れた全ての文末形式は、「～の↓」が2例のみであり、男女が1例ずつ使っている。〈会話3〉はその一例である。

〈会話3〉 BFは文系と理系に分けるのが嫌いと言う。理系であるNMは文系が理解できない。

- ⇒ 201 * NM01 =あの:(2) 話が長いの まず。
 202 * BF01 う:ん。
 203 * NM01 (1) で: 遠回し遠回しで結局(.) 行き着いた: 結論は:(.) 「それはおれらがさっき既に言った言葉じゃね?」みたいな。
 * BF01 う:ん。
 204
 205 * NM01 h h で:(.) 理系の:(.) 人からすれば: {う:ん} あの: ちゃっちゃと出た(.) 数値計算?。
 206 * BF01 う:ん。
 207 / NM01 (1) なんだろう? 何人がいて何人(.) 何個必要でってそういうレベルのものが:、
 208 * BF01 う:ん。

野田(1993:49)では、「のだ」と終助詞「の」の境界の記述において、終助詞化した「の」は、「柔らかなニュアンスだけが特に意識され、丁寧体の「です」・「ます」に接続して用いられることになるのでであろう」と述べている。これは〈表1〉に示した「女性性の要素」である。〈会話3〉を見ると、NMは「～の↓」を用いて自分の主張を明確に示しており、ここから「～の↓」は、〈会話1〉での「～でしょ」と〈会話2〉での「～もんね」と同様に、「男性性の要素」を表す発話機能を持っていると言える。しかし、〈会話1〉と〈会話2〉では、「～でしょ」と「～もんね」を伴う発話の後、異なる意見を提示する相手の発話が続くのに対して、〈会話3〉では、相手のほうからは「うん」という返事のみであり、異なる意見を提示する発話はずぐには見られない。このような違いから、「～の↓」は、「～でしょ」と「～もんね」に比べて、相手がすぐに反応を見せなくても良い文末形式のように見受けられる。言い換えると、「～の↓」を使って主張を行う場合、その主張は、相手に直接向けられていないことが分かる。これは、主張においては控えめな態度、つまり、丁寧さを表していることであり、先

行研究の記述のような表現上での柔らかさが見られる。

以上を踏まえると、男女ともに、女性文末形式の「～の↓」を使い、いわゆる「相手配慮的な主張」を表す発話機能を持つ場合があることが分かる。

5.3 「男性性の要素」も「女性性の要素」も表さない場合

会話中に現れた全ての文末形式は、「～の↑」が6例・「～でしょう」が2例で、全部で8例が現れた。〈会話4〉と〈会話5〉はその一例である。

〈会話4〉 TFは子供はほしくないと言っている。BFは同意しない。

- 375 * TF01 = 「昔からないね:」と。
 376 * TF01 うんゼミでも言ったけど。hhh [hh hh
 377 * BF01 [あ本当: ?。
 ⇒ 378 * BF01 言っちゃったの: ?。
 379 * BF01 [まじで: ? う::ん。
 380 * TF01 [本当。

(中略)

- 392 * BF01 へ:: 子供要らないんだ。=
 393 * BF01 =子供ほしいな::。

〈会話5〉 BFのバイト先の先輩は彼女が他の人と旅行することを不安に思う。BFはその気持ちを理解すると言うが、YMには理解できない。

- 394 * BF04 不安で:(.) なんか不安な気持ちはきつ分かるのね: なんか。
 395 * YM01 なにが不安なの h ?。=
 396 * BF04 =なんかその一週間以上の旅で: ずっと一緒にいたらなんか(.) もしなんか [いい人がいたらそっちの人のほう好きになっちゃうんじゃないかとか:。
 397 */ YM01 [° # # # °
 ⇒ 398 * YM01 (2) うん二人つきりなわけじゃないでしょ。
 399 * YM01 複数じゃん。
 ⇒ 400 * YM01 複数でしょ↑ もっと:。 =

「～の↑」と「～でしょう」に関しては、鈴木 (1997:66,68,71) によると、二つの文末形式ともに丁寧さを表しており、女性語として適切な表現であると報告している。意見の主張度の面から、〈会話4〉でのBFと〈会話5〉でのYMの発話を判断すると、相手と異なる意見は持っているものの、〈会話1〉でのSM・〈会話2〉でのBF・〈会話3〉でのNMほど自分の意見を明確に表していないことが分かる。〈会話4〉では、「～の↑」を用いて相手の意見に対して疑問が多いことを主に表しており、〈会話5〉では、「～でしょ」を用いて自分は相手と異なるポイントに注目していることを、相手に確認させている。ここからは、自分の意見に重点をおく「男性性の要素」が見られるとは言いにくい。また、このような「～の↑」と「～でしょ」は、繰り返して疑問の提示や確認をする場面で使われている。特に、〈会話4〉では、声を大きくした音声的に強調された疑問が連続に現れており、その中で「～の↑」には「～ちゃった」を接続することで、さらに疑問を強くしている。相手の意見に同意しないことを前提とする、強調された疑問の繰り返しと確認の繰り返しは、先行研究で述べている丁寧さでは説明できない。従って、ここに「女性性の要素」が見られると判断するのは難しい。

ここに現れた「～の↑」と「～でしょ」には、全体的に、自分と相手が異なる意見を持っていることを、確認するだけの機能が見られる。以上から、男女ともに、女性文末形式の「～の↑」と「～でしょう」を使い、女性性と男性性で区切られない「確認的な異見提示」を表す発話機能を持つ場合もあることが言える。

5.4 「女性性の要素」を表す場合

会話中に現れた全ての文末形式は、「～の↑」が5例・「～の↓」が1例・「～ね」が2例で、全部で8例が現れた。〈会話6〉と〈会話7〉はその一例である。

〈会話6〉 AFは自分よりはBFのほうがしっかりしていると言う。BFは同意しない。

- 263 * BF02 だってどっちかっていうとうちと『AF01』ちゃんだって『AF01』ちゃんのほうが
しっかりしてるじゃん？
- 264 * AF01 (1) いやそう: じゃないでしょ。 =
- 265 * AF01 =しっかりとかじゃない…よ。
- 266 * AF01 しっかりしてるでしょ? って『##』((人名 BF02))も。
- 267 * BF02 あたししっかりしてないよ。 =
- 268 */ BF02 =なんかぐ h じゃ h ん h ぐ h じゃ h ん h だ h よ h # h # h
- 269 * BF02 な h ん h か h (.) な h ん h か h (.) グミみたい。 hhhhhhhh
- ⇒ 270 * BF02 {hh} ゼリーって言ったらいいの? な h ん h か h 。
- 271 * AF01 hh う h そ h ? そ h っ h ち h ? {hh} 。
- 272 * BF02 本 h 当 h い h や h う h そ h じゃ h な h い h 。

〈会話7〉 MMは男女の違いを十分に理解していると言う。BFはその話をあまり信用しない。

- 395 * MM01 そういうもんだと分かってるよ おれは。
- 396 * BF03 あ: 最初から?。
- 397 * MM01 う: んうん。 =
- 398 * MM01 =怒りはしないじゃん。
- 399 * BF03 あ: もうもうそういうもんだからね↑。
- 400 * MM01 う: ん。
- 401 * BF03 あ::: そうか:: 。
- ⇒ 402 * BF03 (2) そうね:: ↑。
- 403 */ BF03 ## ってれば [ね:
- 404 * MM01 [## °そうそう° 。
- 405 * BF03 (3) °そうか::° 。
- 406 */ BF03 そこまで (.) ° ## #かな::?°
- 407 * MM01 ## (.) ま: もう当然譲れないものっていうのもあるけどさ 個人に。
- 408 * BF03 う: んうんうんうん。
- 409 * BF03 (1) °そうだね::° 。
- 410 * BF03 (1) °な: ん… な: ん… そっか: ° 。

「の」系に関する先行研究の報告は、既に「5.2」と「5.3」で述べたが、ここに現れた「の」系には先行研究で報告されている丁寧さが表れている。〈会話6〉を見ると、BFは相手と異なる意見を持っているものの、通し番号268からは、笑いながら冗談交じりの例え話に方向を変えている。しっかりしていない自分を、「グミ」と「ゼリー」に例えており、相手との意見対立による緊張感を和らげようとする努力が読み取れる。このような一連の流れに「の↑」が使われている。これは自分の意見主張に消極的であると同時に、会話上での相手との円滑な関係に気を配っていることであると言える。このような「の↑」には、先行研究の記述どおりの丁寧さが見られており、「女性性の要素」を表す発話機能が見られる。

メイナード(1994:109)によると、「～ね」は、相手の心的態度に焦点をおいており、感情的な共感を表す機能があると述べている。〈会話7〉を見ると、「そうね」は、その言語形式から考えると、相手の意見に同意しているように見える。しかし、「そうね」が発話されるまで2秒間の沈黙が見られるほか、その後も何秒間の沈黙

や言いよどみを挟み、「そうか」・「そうだね」・「そっか」などが、つぶやくような小さい声で発話されている。また、通し番号406のように、BFが何かを疑問に感じる発話の後、MMは自分の意見を少し弱める発話をしている。ここから、〈会話7〉の「そうね」は、相手の意見に同意していないことを表していることが分かる。相手との感情的な共感を表す「～ね」のこのような使い方は、自分の意見の主張は最小限にし、会話上において相手との円滑な関係性を優先しようとする努力であろう。従って、意見主張においては、極端な消極性が表れており、むしろ相手に気を配る丁寧さが目立っている。ここには、先行研究どおりの相手中心の機能が見られる。つまり、「～ね」には、「女性性の要素」を表す発話機能が強く働いていることが分かる。このような使い方は一人の女性だけに見られた。

相手と異なる意見はあるものの、相手への配慮を優先とする以上のような発話機能を、ここでは、「相手配慮的な異見提示」と名づける。

以上、女性文末形式の発話機能について述べてきた。分析の結果、大きく四つのパターンが見られた。「男性性の要素」のみ表す場合、「女性性の要素」のみ表す場合、両方ともに表す場合、両方ともに表さない場合である。具体例を挙げると、「もん」系には「自己中心的な主張」のような「男性性の要素」を表す機能のみが見られ、女性が使った「～ね」には「相手配慮的な異見提示」のような「女性性の要素」をより強く表す機能のみが見られた。「女性性の要素」を表す場合が多かった「～の↓」は、発話者が自分の意見を重視する場合は、「男性性の要素」と「女性性の要素」が同時に見られた「相手配慮的な主張」を表す機能が観察された。「～の↑」も比較的に「女性性の要素」を表していたが、「男性性の要素」も「女性性の要素」も見られない「確認的な異見提示」を表す機能も観察された。「男性性の要素」を表す場合が多かった「でしょう」系は、発話者が自分の意見に重点を置かない場合は、「確認的な異見提示」を表す機能が観察された。

6 結論

発話機能の面から女性文末形式を分析した結果、まず、従来の解釈どおりの発話機能が見られた。そして、本研究からは、男女による女性文末形式の多様な使い方は、言語形式のみならず、言語機能からも表れることが分かった。女性文末形式には、女性性の要素と男性性の要素を含む四つの発話機能が現れたが、その中で、女性性の要素を表す発話機能のみを持っていたのは、「～ね」だけであった。ここから、女性文末形式の発話機能は、既存の解釈である女性性の要素のみでは説明できないことが分かった。つまり、発話機能の面から見た女性文末形式には、「脱二項対立性」が見られることである。

女性文末形式において、言語形式を中心とした分析を主に行った先行研究の結果と、言語機能を中心に分析を行った本研究の結果は、異なるものであった。日本語と性差の研究において大きな課題である、二項対立的な言語的性差の否定を、本研究では、発話機能の面からより具体的に、その証明を試みることができた。これは、日本語と性差の研究における、本研究の観点の有意義性である。

注

1. 「文」の具体的な条件は、宇佐美（2007）を参考にした。文字化の記号は以下のとおりである。

- | | | | | | | | | | | | |
|-----|---|--------------------|-------|---|-------------------|---|---|-------|---|---|-------|
| ： | は | 音声の引き伸ばし | (数字) | は | 沈黙の秒数 | h | は | 笑い | [| は | 発話の重複 |
| 文字 | は | 強調されている発話 | { } | は | 相手のあいづち | ? | は | 疑問 | 「 | は | 引用部分 |
| ↑ | は | 上昇イントネーション | °° | は | 弱められている発話 | … | は | 言いよどみ | | | |
| # | は | 聞き取り不能の部分 | (()) | は | 転記者による注釈・説明 | | | | | | |
| () | は | 1秒未満の感知可能な間 | = | は | その前後に感知可能な間が存在しない | | | | | | |
| 『 』 | は | 区別が必要な地名や人名などの固有名詞 | | | | | | | | | |

2. 発話がうまく聞き取れなかったり、相手によって遮られたりした場合は、分析対象外とする。しかし、会話全体の内容を把握する場合は参考とする。

参考文献

- 有泉優里 (2007) 「文末形式のジェンダーが話者についての印象に及ぼす影響」『社会言語科学』9-2 社会言語科学会 pp.3-16
- 宇佐美まゆみ (2007) 「改訂版：基本的な文字化の原則 (Basic Transcription System for Japanese: BTSJ)」<http://www.tufs.ac.jp/ts/personal/usamiken/btsj.htm>
- 遠藤織枝 (2002) 「男性のことばの文末」『男性のことば・職場編』ひつじ書房
- 小川早百合 (2006) 「話し言葉の終助詞の男女差の実際と意識」『日本語とジェンダー』ひつじ書房
- 金水 敏 (2003) 『ヴァーチャル日本語 役割語の謎』岩波書店
- 佐竹久仁子 (1998) 「「女ことば/ 男ことば」規範をめぐる」『ことば』19号 pp.53-68
- 鈴木 睦 (1997) 「女性語の本質—丁寧さ、発話行為の視点から」『女性語の世界』明治書院
- 泉子・K・メイナード (1994) 『会話分析』くろしお出版
- 高松雄太・加藤和夫 (2001) 「「甘え」、「甘える」、「甘えさせる」とは何か?—素朴概念の分析を通して—」『九州大学心理学研究』2 九州大学 pp.150-167
- 中村純子 (2000) 「終助詞における男性語と女性語」『信州大学留学生センター紀要』1 信州大学留学生センター pp.1-11
- 日本国語大辞典第二版編集委員会 (2001) 『日本国語大辞典 第二版』
- 野田春美 (1993) 「「のだ」と終助詞「の」の境界をめぐる」『日本語学』12-11 明治書院 pp.43-50
- 深尾まどか (2004) 「終助詞の男女による使い分け」『日本語教育研究』47 言語文化研究所 pp.43-68
- 益岡隆志・田窪行則 (1992) 『基礎日本語文法』くろしお出版
- 水本光美・福盛寿賀子・福田あゆみ・高田恭子 (2006) 「ドラマに見る女ことば「女性文末詞」—実際の会話と比較して」『北九州市立大学国際論集』4 北九州市立大学 pp.51-70
- 山岡政紀 (2008) 『発話機能論』くろしお出版